



保護者も参加して行われた寺子屋修養道場の開会式(当院本堂で)

願 満

復刊第二十四号

2015年 8月

身延別院発行

〒103-0001

東京都中央区

日本橋小伝馬町3-2

Tel 03-3661-3996

Fax 03-3663-2766

寺子屋修養道場

過去最多二十人の子どもさんが参加

「お寺に泊まろう!」寺子屋修養道場が八月二、三日、身延別院本堂などを会場に開かれました。当院青年会が開催したもので、檀信徒の子どもさん、お孫さんなど、これまで最多の二十人が参加しました。

「寺子屋修養道場」は、青年会が子育て支援活動の一環として企画を練り、平成二十二年に初めて開催されました。子どもさん、お孫さんが家族から離れ、お寺で生活することで、人や命に対する感謝の気持ちを養ってもらうことが目的です。

「いのちの大切さ」「ありがとうの心」「助け合いの心」を感じることでテーマでした。一日目の午後一時から、保護者も参加して開会式が行われました。日程説明、法話の後、子どもたちは日本橋から隅田川クルーズに出かけました。お寺に戻ってからは夕食、銭湯体験、就寝前にはビンゴ大会も行われ、楽しい一日を締めくくりました。

一日目は午前六時に起床。朝のお勤めとして、お自我偈とお題目を唱えました。朝食前には、みんなで手分けをして本堂、廊下、境内の清掃を行いました。この後、九段下の科学技術館へ遠足に向かい、館内の施設で有意義な時間を過ごしました。昼食のお弁当をいただいた後、館内で記念写真を撮影。お寺に戻った子どもたちとスタッフ一同は、午後二時半から当院で閉会式に臨みました。

寺子屋では「いのちの大切さ」「助け合いの心」「ありがとうの心」を中心に子どもさんたちに色々なことを伝えていきます。一泊二日で、すべてを伝えることができるわけではありませんが、ほんの少しでも子どもさんたちの将来に役に立ってくれればと思います。

(平山)



緑に包まれた慈眼寺本堂

御首題を いただく旅

第二十四回 千葉市若葉区・慈眼寺

お不動さまで親しまれる日蓮宗寺院

「〇〇不動尊」「□□のお不動さま」などと呼ばれ、地域で親しまれているお寺が各地にあります。

す(〇〇や□□は地域名)。たとえば「成田不動尊」「高幡不動尊」といった具合です。その多くが不動明王をまつり、真言宗系のお寺です。

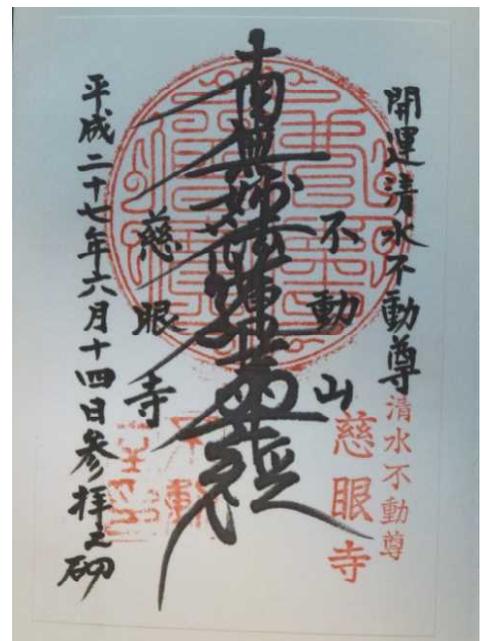
私は先日、千葉市若葉区野呂町の「野呂不動尊」を訪ねてきました。実を言えば、「野呂不動尊」を訪ねるつもりだったのではなく、日蓮宗寺院である慈眼寺の御首題をいただくとうと訪ねたのでした。ところが、慈眼寺の住所に建っていたのが「野呂不動尊」だったのです。

クルマ一台がやつと通れる、雑木林の中の道を進みました。初めて訪ねる人は「この先に、お寺が建つスペースがあるのだろうか」と思ってしまうほどの狭い道でした。やがて本堂が右手に現れました。すぐ隣に庫裏または客殿と思われる建物も建っていました。無任のお寺でした。どうやら私はお寺の裏側の道を通ってきたようでした。

本堂は、水田を見おろす高台に建っています。私はクルマを降りて、正面の参道のほうへ下って見ましたが、参道入り口に建っているのは「野呂不動尊」の石碑だけ。「慈眼寺はどこにあるのだろうか？」という思いが高まるばかりでした。

再び本堂の方へと参道の石段を上っていきこうとしたとき、左手に進む道がありました。そちらへ下りていくと、清水が湧いている場所があり、すぐそばに「由緒沿革」と刻まれた石碑が建っていました。

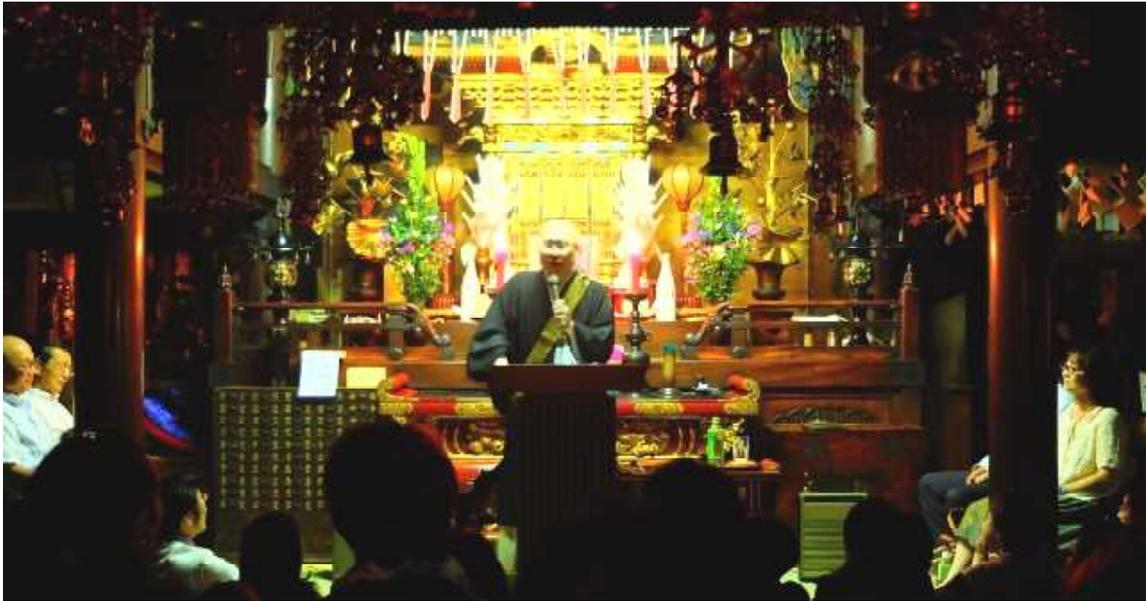
「当山は建治元年(西暦一二七五年)の創立で当地の領主曾谷四郎右衛門直秀が宗祖日蓮聖人の教化を受け、邸内に自らの守護神たる不動明王を



勸請して常に信仰篤く……当地は土地高燥のため日常飲料水に乏しかりしが明王の加護に依りて邸内西北の一隅より清水の滾滾として湧き出せるを奇異とし、直秀感ずる処ありて……堂宇を建立し不動山と号し、中老僧日合上人を迎えて当山の開山とせり……平成七年八月吉日 慈眼寺」。

やはりここが慈眼寺で間違いなかったのです。現在、慈眼寺の住職を代務しているのは、千葉市若葉区野呂町にある日蓮宗五十七本山の一つ、妙興寺でした。私は確かに参拝してきたことをお伝えし、妙興寺のご住職から御首題をいただいたのでした。日蓮宗のお寺でありながら、「不動尊」「お不動さま」の呼び方のほうが親しまれているというのはとても珍しいケースです。お不動さまをまつるお堂の前では、お不動さまの真言を唱えるものとされていますが、私はその日、お自我偈に続いて、団扇太鼓と共にお題目を唱えました。ちよつとだけ不思議な感覚だったことを今でも思い出します。

今年も大好評！三木上人の怪談 百五十一人が集う



多くの参加者で会場は満員御礼に



参加者に主催者を代表して挨拶する副住職



説教的要素も取り入れて語る三木上人。
多くのメディアで怪談和尚として取り上げられている



本堂前には看板も立てられた

身延別院本堂で七月二十三日、「怪談く伝馬町僧侶語り」が開かれました。昨年夏に京都・日蓮宗蓮久寺の住職、三木大雲師を当院に招き、怪談を聴く会を開催したところ、大好評で再開催を望む声が多く寄せられたことから、当院青年会が再び開催しました。

京都・蓮久寺は江戸時代初期の建立で、島原の遊女・吉野太夫との縁が深い名刹です。また、三木上人のもとには、不可解な超常現象に悩まされている人、さまざま霊を供養成仏させてほしいといった人が絶えないそうです。一方で、三木上人は、関西テレビの「怪談グランプリ」で優勝した、名人芸の持ち主です。ただ怖い話をするだけではなく、僧侶ならではの説教的要素を取り入れていきます。

当日の参加者は百五十一人の満員御礼で会場内は熱気であふれ、三木上人の怪談説法を食い入るように聴いていました。今回のお話はその全てが初公開の最新作で、怖い怪談話の中に法華経を元にした説教話になっていました。これまでに仏教になかなか縁の無かった方々の誰もがその場で共感できる怪談説法でした。

身延別院青年会では、当院の檀信徒でなくても気軽に当院に来ていただけるような企画を引き続き開催していきます。

縁結びコンで初のロング太巻き作り

男女十四人が参加、美味しく完成

身延別院青年会が四月十二日、身延別院で「お寺で縁結びコン」を開きました。若者にお寺へ足を運んでもらい、お寺を縁にして、男女の縁を結ぼうという試みです。

今回は、参加者が長さ十メートルのロング太巻き作りにチャレンジしました。太巻きのように、太く長い縁を結ぶことを願うので試みです。

今回は男女十四人(男性七人、女性七人)が参加しました。参加者は午後三時過ぎに本堂に集合。同三時半から地下ホールでロング太巻き作りに挑戦しました。材料と下ごしらえは、保育士で食育インストラクターの吉澤晶子さんが監修しました。参加者はまず海苔を並べ、そのうえに酢飯を薄く置いていき、

海老やキュウリ、レンコンなどの具をのせていきました。そして簀の子の代わりにプリント用紙を使い、一斉に海苔、酢飯、具材を巻いていきました。

用紙を外して太巻きが姿を見せた時は、参加者から歓声が上がりました。出来上がった太巻きは、長さ十メートル。見た目も、味も、初めてとは思えないほど上手に、美味しく出来上がりました。本堂では副住職が「いただきます」「ご馳走さま」の法話と、良縁成就の御祈願を行い、参加者のご多幸をお祈りしました。その後、イタリアンレストランで二次会を開き、参加者たちは連絡先などを交換し合いました。

若い世代にお寺へ足を運んでもらうために今後も青年会は縁結びコンを開いていきます。



長さ10メートルのロング太巻き作りにチャレンジする参加者



太巻きに入れる食材を準備するスタッフたち(写真上)
完成した太巻き(写真左)

寺の動き

海外の青年実業家ら約七十人が参拝



当院で記念撮影をしたメンバー

世界各国の青年実業家やその通訳者など約七十人が、七月八日、当院を参拝しました。公益社団法人東京青年会議所中央区委員会が開催した「国際アカデミー in TOKYO」中央プログラムはっぴーキャンパスに参加したメンバーです。メンバーの多くは日本の文化などを学ぶために来日しており、その中のプログラムの一

つとして当院を参拝し、日本橋小伝馬町の歴史、お寺の歴史を学び、後半は誰にでも簡単に作ることが出来る数珠ブレスレットを作製しました。短い時間でしたがお寺と世界の方々の交流がなされました。日本や中央区をもっと好きになっていただき、是非当院を参拝していただきたいと思えます。

七夕の短冊に願い込め

身延別院で七月七日、七夕祈願を行いました。地域の皆さんにお寺に親しんでもらおうと、平成十八年(二〇〇六年)から始めた行事です。檀信徒の皆さんから申し込みいただいた願い事が叶うように御祈願しました。



本堂の前に設置された笹竹

本堂で施餓鬼大法要

身延別院の盂蘭盆会施餓鬼大法要が、七月十六日午後一時から、本堂で厳かに営まれました。お盆(盂蘭盆会)の送り火の日に行っている恒

例の行事です。今年は檀信徒約五十人が本堂に集い、全員で提婆達多品、お自我偈、お題目などを唱え、ご先祖をはじめ、有無両縁の諸精霊を供養しました。



厳かに営まれた盂蘭盆会施餓鬼大法要

お稚児さん募集

毎年十一月三日に行われる身延別院のお会式で、お稚児さんを募集いたします。また、お会式で本堂の内外に飾り付ける花の製作を十月二十、二十一日に行います。都合のつく日、都合のつく時間帯だけでもかまいません。一時間でも、二時間でも、お手伝いいただける方、どうぞよろしく願います。

副住職らが富士山経ヶ岳大祭に参拝

世界遺産に登録された富士山で七月七日、経ヶ岳大祭が営まれました。例年ですと、身延別院の檀信徒さんも加わっての団参となりますが、今年は箱根山の噴火、昨年の御嶽山の噴火など火山活動が活発になっていることを考慮し、藤井教祥副住職、藤井教瑞師、阿部育修師の3人の僧侶が訪れ、現地で池の妙音寺副住職ご夫妻と合流しました。

富士山経ヶ岳は、日蓮聖人が文永六年(一二六九年)の夏、富士山の中腹五合五勺の地を訪れ、法華経による天下太平・国土安穩を願ってみづから書写された法華経をお埋めになった場所です。「宗祖埋経霊場」とも呼ばれています。



常唱殿を参拝した当院副住職(中央)、教瑞師(右から2番目)、阿部育修師(右端)、妙音寺副住職ご夫妻(左2人)

この日は、小雨の降る荒れた天気に加え、麓から富士山五合目を結ぶ有料道路「富士スバルライン」で交通事故があったため、車線規制が行われ、法要の時刻に遅れるハプニングに見舞われました。副住職らは、常唱殿で自我偈やお題目を唱えました。

岩手・法華寺の阿部上人が当院に



当院とご縁の深い岩手県遠野市・法華寺の阿部是秀住職の次男、阿部育修上人(三十三歳)が六月五日、当院での修行のために着任しました。阿部上人は、総本山身延山久遠寺の信行道場を出た後、東京都杉並区の本山、堀之内妙法寺で二年間、修行の日々を送りました。

その後、大本山・中山法華経寺大荒行堂で初行成満し、自坊の法華寺で修行してまいりました。このたび、ご縁があつて当院で二年間の修行生活を送ることになったものです。

阿部上人は「身延別院の諸行事のお手伝いをします。檀信徒の皆さん、いつでも気軽に声をかけてください。皆さんのお役に立てたらと思っています」と話しています。



今後の予定

- 九月 一日(火) 願満祖師終日お開帳
- 二十日(日) ～二十六日(土) 秋季彼岸会
- 二十六日(土) 秋季彼岸会施餓鬼法要
午後一時より
- 十月十五日(木) 大黒天祭 午後二時より
- 十九日(月)・二十日(火) ベッタラ市
二十日(火)・二十一日(水)
お会式花づくり
- 十一月三日(火) 身延別院お会式法要
午後一時より

編集後記

願満二十四号をお届けします。

一面に掲載した寺子屋修養道場には、今回、二十人もの子どもさんが参加しました。これまで最も多い参加者数で、青年会スタッフもこれまで以上に子どもさんの対応にあたったようです。三木上人の怪談語り、ロング太巻き作りにチャレンジした縁結びの集いにもたくさんさんの参加がありました。

このように、お寺の活発な動きを皆さまに願満紙上でお伝えすることができ、本当にうれしく思います。次回はお会式後の発行を予定しています。

(平山)

べったら市と宝田神社の由来

特別寄稿 石倉 知之

下町の、歳の市のトップバッターとしてべったら市が開催される。その起源は、ずっと古く三百五十年以上前だとされている。最初は、恵比寿講前夜の肴(さかな)市であった。「江戸図説」三(二七七〇年)に、大伝馬町二丁目(現大伝馬町一之部町会)に、「一月・十月恵比寿講の前夜、ここに肴市が立つ」と記載されている。

慶長十一年(一六〇六年)、江戸城拡張のため、宝田村の住人が移住させられて大伝馬町が出来た。隣の千代田村が小伝馬町に移った。その時、宝田村の鎮守様も一緒に移り、引越しの先頭に立った江戸草分け名主の一人、馬込勘解由(かげゆ)屋敷内に勧請されたという(当時は宝田稻荷)。徳川家康から今のご神体である恵比寿神を拝受し、合祀され宝田恵比寿神社となった。その後、徳川家康は、江戸の振興を図って、伊勢の松坂から多数の太物(木綿)商人を呼び寄せ、大伝馬町に住ませた。歌川広重の浮世絵「東都大伝馬街繁栄之図」にある様に、大伝馬町は、江戸で最初に繁栄した町となったのである。各商家は、一月・十月の二十日にご鬘筋、親類縁者を招いて盛大に恵比寿講を祝った。その後、恵比寿講は十月二十日だけになったが、その前夜祭が肴市である。この肴市が、現在の「べったら市」のルーツである。肴市は当初十月十九日と決まっていたが、終戦後、二十日にも続けて市を立つようにした。

この市では大根を麴漬けにした漬物「大根の浅漬け」が人気を博し、店の数も増え、景気のいい兄さんたちが、「買わないと、綺麗な着物にべったり付けるぞ」と若い娘たちをからかったことから、市そのものの名称も「べったり市」、後に「べったら市」と呼ばれる

るようになり、それが名称として定着した。

宝田恵比寿神社(宝田稻荷)は、文政年間(一八一八-一八三〇)に、馬込勘解由屋敷内から現在の所へ遷御された。明治六年一月神田明神の兼務社となり、現在に至っている。

数年前に「べったら音頭」(野村博作詞・中川翼作曲)が出来、シニア会の皆さんで、べったら市の中で披露される。またニューミュージック「べったら市」(石倉知之作詞作曲・斎藤弦太編曲)がべったら市中スピーカーから流れている。

御献灯提灯の数は約千五百灯、露店数は約五百店、参詣者数は約十万人。旧大伝馬町一丁目、関東大震災後の町名変更で、本町三丁目東町会となってしまったが、旧大伝馬町一丁目(現本町三丁目東町会)と旧大伝馬町二丁目(現大伝馬町一之部町会)から役員を出して「諫鼓(れんこ)会」を組織し、同会が宝田恵比寿神社をお守りしてきた。その後、「べったら市保存会諫鼓会」と改名している。この歴史のある「べったら市」を保存し、伝統を守っていくことが、ここに住む者の責任であり、義務であると心得ている。



◇石倉知之(いしくら・ともゆき)

昭和5年日本橋大伝馬町生まれ。東京大学で、農芸化学を専攻。卒業後、現メルシャンに入社して発酵製造を研究。この間、アメリカに留学。現在、地元で貸しビル業を営む。大伝馬町一之部町会長を10年間にわたって務め、大伝馬町の活性化に尽力した。別院檀家の野田家の親戚に当たる。農学博士。